

「寿式三番叟」

初代 鶴沢道八／述

鴻池幸武／編

〈出典：『道八芸談』鴻池幸武、昭和19年1月〉

最近では文楽座でも度々出ますし、四五年前に京都の顔見世興行で猿之助さんが踊って私が弾きましたのが大変当って、それ以来毎年出るようになりました。

この曲で一番大切なことは、翁、千歳、三番叟の三つの位取です。我田引水のように、その点で、能の「翁」は別として、各流の「三番叟」の中で義太夫の「三番叟」が一番結構に出来ているように思います。これ程位取の鮮かなのを外に知りません。私がいつも知りたいと思っていますのは、これを節付された方のお名前です。これ程結構な曲が残っているのに未だに不明なのです。

文章は中々難しいもので、よくその意味を研究しませんと飛んでもない間違いをします。かの「とうとうたりー」は蒙古か西藏あたりの言葉だそうで、以前ある博士が解説されたのが新聞に出て、切抜いて置きましたが、要するに位取が最も肝腎で、それによって夫々「音遣い」、「足取」、「間」、「模様」のやり方が違うのです。

翁は宇宙の支配者の格で、殊に面をつけてからは畏れ多くも天照皇太神宮様の位ですから、雄大無比でなければいけません。「万代の池の亀は甲に三曲を戴いたり。滝の水麗々と落て夜の月あざやかにうかんだり渚の砂さくさくとして^{あした}旦の日の色をろうず」有様を御覧になって、「天下がよく治まっている、悦ばしいことだ」と舞を舞うて御座るのです。といってこれを殊更に勿体振ってやりますと陰気になってしまいます。翁を語って陰気になったら恥です。私が聞かせて頂いた翁の中で最も結構でしたのはやはり大掾（二代目竹本越路太夫）〔編注：竹本撰津大掾〕さんでした。明治十八年東京猿若町の文楽座開場祝のときで、その音遣いは子供ながらに神々しく感じました。その前に彦六座の改築祝のときに柳適さん（初代）が語られましたが、これも結構でした。この時は清水町の師匠が弾かれ、三味線ではこの方の右に出るものはないことは申すまでもないことです。千歳は武士ですから、何物にも^{ひる}拉がぬ勢がその「間」になければなりません。

三番叟は農民で、世界中の喜びを我身一つに受けて悦んでいる、という心でなければいけません。それにこれは狂言ですから、詞は狂言風にいわねばならず、今日の文楽座でこれが出来ているのを聞いたことがありません。それから「御田」の条で、早乙女と神主さまのやりとりの語り分け、弾き分けが曖昧になりやすいもので、よく気をつけねばなりません。